

実践プログラム 1:

「環境変動に柔軟に対処しうる社会への転換」 ミッション・ステートメント

研究目標

人間活動に起因する環境変動（地球温暖化、大気汚染などを含む）と自然災害に柔軟に対処しうる社会への転換を図るため、具体的なオプションを提案する。

ミッション

環境変動、自然災害関連の研究を全体的に見ると、地球圏由来の事象や、その生態系との関連を主題とし、人文・社会科学との連携が弱いものが多い。しかし、21世紀における地球環境変化研究の進展に伴い、地球環境の持続性が人間社会にとって持つ、より根源的な重要性も認識されはじめている。人間圏の持続性ととともに、地球圏、生命圏の持続性を「生存」という共通の観点から評価する「生存基盤論」の試みもその一つである。本プログラムではこうした潮流を意識しつつ、地球環境の持続性の視点から人間社会の規範や制度を理解し、社会構造の質的な「転換」 **transformation** を進めるための新しい学問の枠組みを作ることを目指す。

本プログラムでは、第一に、アジア型発展径路の研究を推進する。アジア地域の多様な社会体制と経済発展の中で起こっている環境問題を取り上げ、各地域の政治的経済的条件や文化的社会的な潜在力を、欧米のそれと対比させながら評価するとともに、自然科学の新しい知見や技術革新を生かしてそれに対処する道筋をつける。自然科学の手法から得られた知見を、タイムスパン、地域スケール、問題関心の異なる人間社会の歴史と突き合わせることによって、「生存基盤の確保と持続」の条件を探る。

第二に、ステーク・ホルダーとの協働によって生存動機のあり方を多面的に解明する。そもそも社会の持続性を確保するには、生存、利潤、統治、保全の4つの動機が適切に働くことが必要であり、それにふさわしい価値観と制度が機能する社会を作らねばならない。利潤動機、統治動機については社会科学の手法が存在し、ローカル、リージョナル、グローバルなレベルでの保全動機の掘り起こしには、自然科学の知見の貢献が大きい。しかし、生存動機は、対象そのものが哲学、心理学などから医学、生態学にいたる、幅広い学融合を必要とするテーマである。現場から問題を発掘し、他の3つの動機との調和のとれた研究を促進する。

第三に、政策を提案し、課題解決に具体的に貢献することを目指す。フィールドワークの現場から政策担当者、国際機関にいたるまで、多様なステーク・ホルダーと重層的に連携することによって、激しく変化する現実の課題を可視化、概念化すると同時に、学術的研究を、課題解決に向かう質を持つものに方向づける。

本プログラムは、これらの目的を達成するにふさわしい、いくつかの具体的テーマを研究するプロジェクトを有機的に連携させ、内外の公論形成に寄与することによって、研究成果を社会構造の転換につなげることを課題とする。